

阿岐のまほろば

Vol. 16

飯田「土居遺跡」特集！

土居遺跡（八本松町飯田）



馬出は、戦国末期の東日本で発達した防御施設で、城の出入口の前に堀を掘り、その外側のさらに堀で囲まれた空間をいいます。外から馬出に入るには馬出の両脇から土橋などを渡って入りますが、その橋を渡る時は城を横目で見ながら渡らなければなりませんので、守りやすく攻めにくい構造になっています。また、馬出が占領されても内側の橋を落とせば、敵はまた堀を渡らなければならないのです。

櫓形は、城の中でもっとも攻められやすい場所である出入口を守るための形式のひとつで、「馬出」と並んでもっとも発達した出入口形式です。発達した江戸時代のお城では一般的なもので、石垣や土塁で出入口を方形に囲み、前と後ろに門を二重に構えたものです。通常は堀を渡る外側の門（二の門）を高麗門とし、折れ曲がって城内に入る内側の門（一の門）を櫓門としています。これによって敵が櫓形内に侵入してきても、門を閉じて敵を櫓形内に閉じ込め、周囲の土塁の上から迎え撃つことができます。また、出撃の際には、城兵の待機場所になります。

図1 土居遺跡想像復元図

土居遺跡は、八本松町飯田に所在する戦国時代の城館跡です。保育所の移転に伴って遺跡の一部約500㎡を平成11年5月から6月まで発掘調査しました。

調査の結果、広島県内では珍しい大規模な平城の跡であることが明らかになりました。

今回は、この飯田の土居遺跡をご紹介しますと思います。

図1は、土居遺跡の想像復元図です。なぜこの図のような復元ができるのか説明しながら土居遺跡の詳細をみていくことにしましょう。

写真1は調査区の全景です。ここに見える堀は、

出土遺物から、16世紀前期から中頃にかけてのものであることが明らかになりました。

この堀は、現状で幅10.7m、深さ約3mもあり、16世紀中頃のものとしては全国でも最大級の規模です。

調査区は、城跡全体の中では写真2でわかるようにほんの一部ですが、地形からみて城の背後に当たる部分になります。城跡の前面には写真2や図2でわかるように堀の痕跡や地名が残っており、幅広い堀があったことがわかっていました。

ところが、今回の調査で城の裏側に当たる部分にまで大規模に堀がめぐっていたことが明らかに



なったのです。このことは、城全体を写真のような大規模な堀が取り囲んでいたことを意味します。

また、堀の城内側には、L字形に何も遺構が無い部分があり、土塁の痕跡と考えられました。

これほどの堀を掘ると大量の土砂が出ますから、その土を盛り上げて土塁を築いたものと考えられます。つまり、堀が城全体をめぐるように、土塁も城全体を囲んでいたと考えられるのです。

では、城の範囲はいったいどこからどこまでのでしょう。

図2は、字「土居」の範囲を示す地籍図です。これを見ると字「土居」の境界と城を取り囲む「堀」の付く地名とがよく一致し、字「土居」の範囲が、ほぼ城跡の範囲であることがわかります。

それでは、今回の調査でもっとも重要な発見である「塀形」についてみていきましょう。

図3は、調査区内で見つかった戦国時代の遺構の配置図です。土塁の跡がL字形に折れ曲がり、その南東側には水溜状の溝や建物の柱穴がたくさんあります。

一方の北から西側にかけては、土塁跡から一段下がって平坦面が堀の中にまで続いています。こ

れは、城内と城外を結ぶ通路の跡で、堀の中に飛び出した部分は土で造られた橋、土橋です。

この土橋は、堀の対岸まで続かず、間に溝が掘られています。この溝は、土橋より西側の標高の高い堀から流れてくる水を下方の東側に流す機能があったものと思われ、調査区の西側にも堀が続いていたことの証拠の一つになります。

さて、土橋から城内に入る平坦面は、そのまま進むと城内でもっとも標高の高い、かつて屋号を「土居」といった屋敷地の下に突き当たります。こ



図2 字「土居」地籍図 (1:3,500)

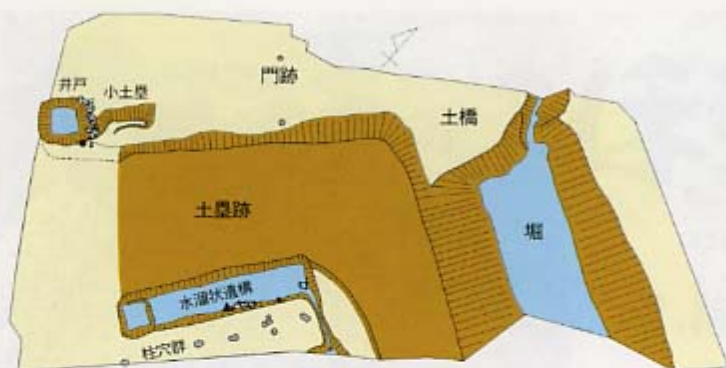


図3 遺構配置図(戦国期)(1:400)

の屋敷地はいわゆる本丸に相当する場所で(以下仮に本丸と呼びます)、『川上村史』によれば、東南方を除く三方に土塁がめぐっており、現在でも西南にその痕跡があります。

つまり、この通路状の平坦面は、本丸と土塁によって城内と隔てられ、さらにその外側には土塁と堀がめぐっているはずですので、この平坦面は土橋の方向を除いて周囲をぐるりと囲まれていることになります。そして、このような構造を「**枡形**」と呼びます。

土居遺跡の枡形を見ると、枡形内の平坦面に、図3のように中央やや外寄りに柱穴が2つあります。これは門と考えられますが、間口が約3.6mもあり、主柱としては貧弱ですので、控柱と推定され、主柱が礎石の上に立ち、控柱を持つ高麗門であったことが考えられます。

また、枡形のもっとも奥、本丸と土居跡の間に方形の井戸と小さな土塁があります。井戸の小土塁側には石が並べられ、土堀があったことが推測できます。また、小土塁も土堀の基礎と考えられますので、L字形に土堀があったと思われます。ここは、枡形が屈曲して城内に入る一の門の前に当たり、一の門への通路を一人が通れるほどに狭める役割を果たしていました。これらのことから、土居遺跡の枡形は図4の模式図のようになっていたと考えられます。

仮にこの城が攻められたとすると、攻め手は、広い土橋を渡って二の門に殺到します。どうか門を破って枡形空間に侵入しても、本丸や周囲の土塁の上から城側の反撃を受けてしまいます。さらに中に入るためには、小土塁のところを一人ず



← 城攻めの際のルート
大人 少年

図4 土居遺跡枡形模式図

つ通らなければなりません、この先には一の門があり、それを破る作業は先頭の一人がしなければならぬのです。その上、周囲からの攻撃はますます激しくなり、仮に一の門を破ったとしても、その先は本丸の南端が東に突き出て喰い違い虎口になっており、容易に城内への侵入を許さない構造になっていました。

一方、城兵が出撃するときは、小土塁のところを抜けて枡形に集結します。枡形は11m×8m以上の広い空間ですので多くの兵を収容することができます。そして、内側の門を閉めてから外側の門を開いて打って出るので。外側の門は馬に乗ったまま通れる広い門ですので、一気にどっと出撃することが可能です。

土居遺跡の枡形は、外側が高麗門で内側が櫓門と考えられ、ほぼ完成された形の枡形であったことが知られます。つまり、非常に発達した防御及び攻撃の機能を備えていたといえるのです。

調査されたこの枡形は、城の裏側に当たります。では、正面はいったいどうなっていたのでしょうか。

城の東側には大山峠から西条方面に抜ける主要街道が通っており、こちらが正面と考えられます。ここには図2に見られるように「堀」と呼ばれる水田に囲まれた畑地があり、その性格が問題となります。城の背後に当たる部分に極めて発達した枡形が存在したことから推測すれば、もうひとつの発達した虎口である「馬出」である可能性が高いといえます。この馬出状の区画は、堀に囲まれた独立した空間を城門の前に置くことによって、攻守両面にすぐれた機能を発揮するものです。たとえば馬出が占領されても内側の橋を落としてしま

えば、敵はまた堀を渡らなければならないのです。しかも、この区画は、城内に食い込む形になっているので中に入った敵は枳形同様、三方から攻撃を受けることになるのです。

枳形も馬出も16世紀末期に完成に近づいたとされる施設で、特に馬出は、西日本では江戸時代の城に少数見られるだけです。

このように発達した防御施設を持つ城は、この16世紀中頃という時代のものはまったく見つかっていません。特に枳形は、ほぼ完成された姿を持っており、特筆されます。

では、このような発達した城は誰の城なのでしょう。

結論からいえば、山口の戦国大名大内氏の官僚、東西条郡代の可能性がもっとも高いと思われます。

大永3(1523)年の鏡山落城後、この地域の支配拠点は土居遺跡の近くの枳城に移ります。枳城には大内氏の重臣が東西条代官として在城しており、代官が留守の時には小郡代が政務を代行していました。天文12(1543)年頃、東西条代官が安芸守護代に昇格し、小郡代が東西条郡代に昇格します。

安芸守護代弘中隆兼は、守護所を枳城から南方の槌山城に移します。その理由は不明ですが、それによって枳城のすぐ北を通る山陽道の大山峠や、やや北に位置する今坂峠といった主要な街道から守護所が大きく外れることになりました。

郡代にそのまま枳城を守らせることも可能ですが、枳城は巨大な城で、標高も高く、維持には莫大な費用がかかります。また、写真2でもわかるように、どこからでも見える大きな山で、しかも、安芸守護代と同等の地位にあった東西条代官が在城していた城ですので、支配の象徴としての意味もあったと思われます。

守護所は、槌山城に移っていますから、枳城と並び立たせるわけにはいきません。そこで、2本の主要街道を押さえる位置で、しかも、防御は極めて固いが、シンボリックな意味のない平地にこの城が造られたものと思われます。

さて、この当時の郡代が誰であるか、はっきり書かれたものはありません。しかし、弘中隆兼が山口に帰っている間、槌山城代をしている菅田宣



図5 遺跡位置図(1:100,000)

真が考えられます。この菅田氏は、飯田、特に土居遺跡周辺や、そばの妙徳寺と深い関係にあったとされ、墓も同寺にあります。

これらのことから、土居遺跡は大内氏が築き、郡代を在城させた城であると推測されるのです。

また、その廃城の時期は、毛利元就が、陶・大内氏に謀叛を起こして、石見出陣中の大内方諸城を攻めて安芸を手中に収めた天文23(1554)年頃とみるのが妥当でしょう。

土居遺跡の調査は、鏡山城、枳城、槌山城などとともに大内氏の築城技術が他の戦国大名をはるかに凌ぐものであったことを示し、また、中世城郭が多様な発達を遂げていたことを明らかにした点で極めて重要なのです。(吉野)

阿 岐 の ま ほ ろ ば Vol. 16

阿 岐 の ま ほ ろ ば Vol. 16

発行日 1999(平成11)年8月27日

編集 財団法人東広島市教育文化振興事業団/文化財センター

発行 東広島市西条町大字馬木541-1

TEL 0824-25-3880 739-0033

印刷 電子印刷株式会社

広島市中区堺町1-1-5